
リスニング・ポイント

中野 里美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リスニング・ポイント

【Nコード】

N8322S

【作者名】

中野 里美

【あらすじ】

主人公の見る幻覚の世界です。

お隣さんに小人が入居した。僕の住むアパートは全部屋同じ作りをしている。なので、小人の部屋もフローリング張りの六畳部屋で、小さなロフトがあり、ごくごく普通の一人暮らし向きの部屋に違いない。どうしてこんな自然の少ない場所に入居してきたのか不思議だった。

たいていの小人は森や山のなかで、大木に小屋を作ったり、岩の隙間でこっそり暮らす。そこで笛を吹いたり、踊りを踊ったり、絵を描いたりして日を過ごす。

でも詳しいことはあまり知らない。小人に接する機会なんてないし、たとえ見つけても彼らはすぐに隠れてしまう。前にテレビで小人の生態を探るドキュメンタリー番組をやっていたけど、彼らは野生動物よりも敏感ですぐにカメラに気が付いてしまうから、あまりたいした内容ではなかった。小人を収めた瞬間も、ピースした小人が映っていたくらいだ。

一度話してみたかった。ただ、アパートの部屋が隣同士というだけで気軽に遊びに行けるかといえば、そんなことは無く、どうにか接することのできる機会を僕は待っていた。

しかし、その日は意外と早く来た。

僕は小さなレンタルビデオ店で働いており、時給は九百円と安いんだけど、一人で働ける。好きな音楽も聴けた。お客さんも少ないから、椅子に座って小説を読んでいることも出来た。

その日も適当にCDをかけて、小説を読んでいた。

トントんと自動ドアを叩く音がして、本から顔を上げると、ドアの向こう側に小人が立っていた。小人の身長は四十センチ程度で、民族衣装のような格好をしている。織物のストールを巻きつけて、小さなスニーカーを履き、白黒柄のニット帽を被っていた。どうやら自動ドアが反応していないいらしかった。

開けてあげると、店に入るなり小人は踊りだした。

たぶん、音楽がかかっているからだ。ただ、流れていたのは『モ
ーフィン』で踊れる音楽じゃない、だけど踊っていた。ためしにC
Dを替え『森高千里』をかけた。すると、踊りは止まった。

ほっとしてもよかったけど、この店は埃が溜まっているし、他の
お客さんにも迷惑をかけてしまう。小人の他にお客さんはいないけ
ど。

小人はDVDを持ってレジまで来た。高いところにある商品は、
棚によじ登って器用に取っていた。僕は関心して見ていた。たぶん、
野生では木の実なんかもあやつて取るに違いない。

小人の選んだDVDは『運命じゃない人』『未来世紀ブラジル』
『らき すた一卷』だった。

僕はレジの前に予め脚立を用意しておいた。

簡単な手続きの後、会員カードを渡した。小人の名前は『山田・
一世』というらしい。名前を会員カードの裏に書いてもらう。

「あの、僕の顔見たことありません？」

と商品を渡してから僕は言ってみた。

小人は「うおおお！」とリアクションした。それから被っていた
ニット帽がズレたのか、両手で位置を直した。

僕は言った。

「隣に住んでる飯田と言います」

「わたくし、山田・一世と申します。よろしくお願ひしますアアア」
と山田さんは胸に手を当てて、歌うように言った。

僕は顔を覚えてくれて嬉しかったので、サービス券を渡した。

「これ次回出してくれれば一本サービスできますから」

小人はサービス券を受け取ると、サツとニット帽の中に入れた。

それから「感謝・山田・一世アアア」と歌うように言った。

僕はそのテンションにどう反応していいのかわからず「ゲツジョ

ブ・飯田アアア」と言った。

山田さんは「え？」と困ったように呟いた。

僕は反省した。

黙っていると、山田さんは「どうもありがとうございます。次来たとき使わせてもらいます」と言っ、開けたままの自動ドアから出て行った。

バイトが終わってアパートに帰った。ビールを飲んでいると、ドアをノックする音が聞こえた。玄関に立って、ドアスコープを見ても誰も映らない。

チェーンを掛けたままドアを開けた。

「うつす」

と足元から声がして、見ると山田さんがいる。隙間から勝手に部屋に入ってしまった。

山田さんの手にはCDケースが握られていた。それをテーブルに放り投げて、一枚CDを取り出し、レシーバーのなかに雑に入れ込んだ。

「あの、……」

僕は何を言えばいいかわからず、ただ山田さんの様子を見ていた。CDケースを見ると『ニューオーダー』『マツシヴ・アタック』『マドンナ』のアルバムだった。

音楽が流れる。山田さんは腕を組んでいた。それから、なにか思いついたように錠を取り出してスピーカーケーブルを切った。それを短くして付け直す。その後スピーカーの間隔を広げた。スピーカーの脇にあった観葉植物は窓際に移動された。山田さんはニット帽の位置を直した。さらにスピーカーの位置を何回か直したあと、満足できたのか、山田さんは踊り始めた。

うちで小人が踊っている。

僕は山田さんに話し掛けた。

「山田さんって、どうしてこんなところで暮らしてるんですか？」

「やしーって呼んで」

「やしーはなんでこんなところで暮らしてるの？」

「俺は都会に憧れていたんだ。資本主義と物質主義に心底恋焦がれていたんだよ。もう自然の住人なんてやってられねーよ。鳥獣に命を狙われるなんて、類人猿かっての」

山田さんは鼻で笑った。

小人にも色々な人がいるんだな、と僕は思った。

「今度うちに来なよ」

「え、いいんですか？」

「いいよ」

今度、小人の部屋へ行くことになった。

山田さんは僕が三本ビールを飲んだ頃に帰った。帰り際に店で流していた『モーフイン』のアルバムを持っていった。

山田さんが帰ったあと、踊っていたところに座り、音楽を流した。そこはリスニングポイントになっており、部屋全体から音が出ているような錯覚に囚われた。聴覚から味覚、嗅覚、視覚、触覚へと刺激が伝わった。僕は森高千里のロックン・オムレッツを聴いてニルヴァーナを体験していた。下を見ると体から意識が飛び出ているのがわかった。こんなのもう麻薬じゃないか……。

翌日、バイトが終わると僕は山田さんの部屋にお邪魔した。

昨日の体験で、少し小人に恐怖を感じるようになっていた。しかし好奇心が勝った。ちなみに僕の部屋のオーディオは、音楽を聴くたびにトリップしていたら廃人になってしまうので、セッティングを微妙にずらしている。

山田さんの部屋には間接照明が置かれ、木製の二人掛けソファが置かれていた。柔らかい絨毯も敷かれていた。オーディオには、パイオニアのアンプ、CDプレイヤー、ダイナウディオのスピーカー、テクニクスのアナログプレイヤーが置かれ、中央に東芝の液晶テレビが綺麗にセッティングされていた。

テレビの横には『涼宮ハルヒ』のフィギュアがあった。それから『エヴァンゲリオン』『エウレカセブン』『攻殻機動隊STAND

ALONE COMPLEX』『涼宮ハルヒの憂鬱』『ネギま!』
その他色々なアニメのDVDがテレビラックに揃えられていた。

僕は部屋に入るととりあえずソファアに座った。

山田さんは絨毯の上にノートパソコンを広げて、タブレットを使
って絵を描いていた。ソフトにはSAIを使っている。

絵はエウレカセブンのキャラクタだった。

「すげえ……」

僕は声を漏らした。

上手すぎる。いやもう、上手いレベルを超えていた。わけがわか
らず感動してしまう、説得力が絵にはあった。まだ下絵の段階なの
に。ヤバイだろ……。

「小人つてみんな絵が上手いんですか？」

「暇だからね。やること無いから」

「パソコン使って絵描くんだ……」

「普通は油絵つすよ、染料も自分で作る人が多いし。親父なんかそ
うだったよ」

「なるほど」

「なんならこの絵いる？」

「いいの!？」

「完成したら持ってくよ」

小人の絵を売ったら、物によっては数十万以上の値が付く。芸術
品だ。ただ、この絵はアニメのイラストだし、パソコンで作ってい
るから値段は付かないと思うけど。それでもすごい品には違いない。

「額に入れて飾らせて頂きます」

「ふっふふ。こんなもんでよければ」

と山田さんは笑った。

僕は手ぶらで来るのも悪いかと思って、飲み物を買って持ってき
ていた。バックから出して山田さんの横に置くと「サンキュー」と
言って両手で掴み、絵を描くのを中断した。

二人でコーラを飲んだ。

「今日は音楽かけないの？」

山田さんは何か考えるように首を傾げていた。それから言った。

「踊るの面倒くさいし」

踊る必要ない気がする、と思ったけど、余計な詮索はしないことにした。音楽が鳴れば小人は踊らなくてはいけない。そうに違いない。

山田さんは鼻歌を歌いながらテレビを付け、DVDのリモコンで操作した。昨日レンタルしていった『未来世紀ブラジル』が映し出された。

山田さんは映画を観ながら絵を描いて、二十分くらいで他のDVDに移し変えた。

『攻殻機動隊STAND ALONE COMPLEX』の六話目だった。もしかしたら、僕に気を使ってくれたのかもしれない。なんとなく。

「なんか適当に遊んでいいよ」

と山田さんに言われ、僕は辺りをキョロキョロ見渡す。

「CDラック見せてもらっていい？」

「ロフトっす」と言うので、梯子を登ってロフトに行く。

そこには、小人間のベッドと、CDとDVDが整頓されて入っている棚があった。山田さんの描いた完成された絵も画鋏で留めてあり、筋肉マンと聖闘士星矢のフィギュアも揃えられていた。気持ち良くくらい趣味全開だ。しばらく見惚れていた。

僕はロフトを降り、山田さんに言った。

「お邪魔しました。もう帰るよ」

「またいつでもおいで」

山田さんは絵を描き続けながらそう言った。

自分の部屋に戻り、ベッドに寝転がった。

もし、あの部屋で音楽を聴いたら僕はどうなっていただろう、そう思うと怖かった。でもとても気になり、少し後悔もしていた。

眠ろうとして目を瞑ると、山田さんの絵が浮かんだ。頭から消え

ずに、その日なかなか眠ることが出来なかった。

僕はあまり夢の内容を覚えておくことのできる方ではない。ただ、その日見た夢はハッキリと覚えていた。どこかビルの屋上のようなところにおいて、ヘリコプターに乗り込むところから始まった。ヘリコプターはビルの間を飛ぶのだけど、ドアが開いたままだ。僕はシートにも座っていないくて、強い揺れが起こったとき落下してしまう。

それから毎日浅い眠りしか取れず、見る夢は決まってヘリコプターから落ちる夢だった。不眠症になり、僕は煙草を覚えた。バイトに来るお客さんが奇妙な動物に見える。顔が豚で体がペンギンだった。早口で何を言っているのか聞き取れない。

気分が悪かった。レジの奥にあるトイレの中で煙草を吸い、神経を無理矢理沈めた。

自動ドアが開く音がして、煙草をもみ消しレジに出る。見ると山田さんだ。自動ドアはこじ開けて入ってきていた。

「こんにちは」

「うっす。返しにきたよー」

商品を受け取り、返却を済ませた。

「サービス券で借りていいのかな」

そう言っつて、山田さんは陳列棚に歩いていき、しばらくして商品を持ってきた。『マネキン』。

貸し出しを終わらせると、山田さんはニット帽の中から折りたたんだ用紙を取り出した。

「完成したから持ってきたよ」

開いてみると、この前描いていたアニメのイラストだ。ただ真似ているだけじゃなくて、山田さん独自の背景や色使いがされていた。絵に吸い込まれそうになる。

「大切にするよ」

山田さんは鼻歌を歌いながら店を出て行った。

山田さんが出ると同時に、女の子が店に入ってきた。女の子はただ小学生の真ん中くらいだ。カットソーに短いデニムを穿いており、手には赤いマニキュアがしてあった。ショートヘアで前髪をピンで留めている。

女の子はレジの前に来て言った。

「ここって小人が来るの？」

僕は黙っていた。煙草が吸いたかったから、黙っていれば帰ってくれると思った。

女の子は僕を睨んだ。

「ちよつとそつちに行ってもいい？」

そう言っただけでレジに入ってきて、僕の反対側の椅子に座った。

「勝手に入っちゃ駄目だよ」

女の子は無視して言った。

「いい、よく聞いて」

彼女は僕の目を見ていた。僕は困惑した。

「小人はすごく危ない奴等なの。あいつらは、山や森に押し込めておかないといけないのよ。だって、人を駄目にするんだから」

「いい人だよ」

「それでも駄目なものは駄目！」

「……」

「わかった？」

僕は首を縦に振った。

「よかった。じゃあ、そういうことだから。また来るからね。煙草は吸っちゃ駄目だよ」

「わかりました……」

女の子はスタスタと店を出て行った。

僕はトイレに入り、煙草を吸った。

僕は家に帰ると、貰ったイラストを額縁に入れてオーディオの上

に飾った。イラストを見てみると、山田さんの部屋に行つて、音楽を聴いてみたくなった。CDラックにあつた音楽を思い付くままかけてみたい衝動に襲われた。

僕は早めにベッドにつくことにした、毛布を被つて震えていた。その日も落下する夢を見た。起きてから気が付いたのだけど、だんだん、地面が近づいている。

バイトは休みだ。僕は部屋でテレビを付けてボーっとしていた。時計を見るといつの間にか昼過ぎになっており、ダルい体を動かした。音楽をかけて、無理矢理腕立て伏せをした。三十回したところで息切れした。それから洗顔を済ませた。鏡を見ると、顔には生気が無くて、年寄りみたくしわがあちこちに出来ていた。寝不足のせいかもしれない。

外は天気がいいので、ジョギングをしようか悩んで止めた。煙草も吸い始めていたし、今のところ止める気はない。それに、走つても体調が改善するどころか、途中で気持ち悪くなるだろう。僕はインスタントのコーヒーを作り、読みかけの小説を開くことにした。『深夜プラス1』。

オーディオはトリップしないように、セッティングをずらしているものの、以前に比べてとても音が良くなっている。『ヨハネス・ブラームス』『ジョン・コルトレーン』『ブルース・スプリングス・ティーン』『レディオヘッド』色々なジャンルの音楽をかけた。煙草の本数は増えた。

読書をしていても不思議と疲れなかった。深夜プラス1を読み終わると、小説を適当に回し読みした。

ただ、あとであらずじを思い出そうとしても上手くいかなかった。

翌日、僕はダルい体を動かして、バイトに出た。体にヘド口でも詰まっているようだった。もう「いらっしやいませ」も「ありがと」うございます」も愛想笑いもする気が起きない。小説を読む気すら起きなかった。

ふと今日見た夢を思い出す。ヘリコプターから落下し、地面はもうすぐそこまで迫っていた。目が覚めると、僕は汗をびっしょりかいて、ぜはーぜはーと病人のような呼吸をしていた。

気分が悪くなり、トイレで煙草を吸った。二口吸ったところで自動ドアが開く音がして、しぶしぶレジに出る。入ってきたのはこの前の女の子だった。

女の子は僕の顔を一瞥すると、するりとレジ奥に滑り込んで来た。「勝手に入っちゃまずいよ」

僕がそう言くと、女の子は「煙草吸っちゃ駄目って言ったじゃん」とローキック打った。僕のスネにペチリと当たる。

「吸ってないよ」

「死ね」

「……」

謝るか悩んで、結局黙っていることにした。

女の子は椅子に座って言った。

「あなたも分かってるんでしょ。これ以上、こんな生活してたらマズイって」

「そうなの」

「そうじゃん。その顔見ればどれだけ体調が悪いか誰にだってわかるよ。それとも精神病院の閉鎖病棟に入れらるまで分からないつもり？」

「閉鎖病棟って……それは嫌だよ」

「じゃあ、私の言うとおりにして」

「……わかった」

彼女は僕に指きりをした。それから言った。

「あの小人を殺そう」

「無理でしょ」

「簡単よ。踏みつけて、ぶんぶん回して、ドブにでも放りこめばいいんだから」

「いや、マズイよ」

「大丈夫。それであなたは睡眠不足からも解消されるし、悪夢も終わる。煙草も止められるし、体調も改善するから」

「本当に？」

「もちろんよ。いい、このままじゃあなたは死ぬかもしれないのよ。その前に小人を殺さなくちゃいけないの。これは小人とあなたの戦いなんだから」

「……森に追い返すとかじゃ駄目？」

「残念だけど、それじゃ助からないわ」

「……」

僕はしばらく黙っていた。でも頭は働いてなかった。ぼんやり山田さんを殺す自分の姿を想像していただけだ。

女の子は脚をブラブラさせながら、椅子に座っていた。でも、お客さんが来ると商品の返却作業や受け渡しを手伝ってくれた。僕はまたトイレで煙草を吸った。女の子はトイレに入ってきて、僕を睨んだ。僕は女の子がいる間だけ煙草を吸うのは諦めた。

暇な時間に女の子はもくもくと話をした。僕は黙って聞く。

早く結婚したいといったこと。そして子供を二人ほしいといったこと。海の近くに別荘を持って、大型犬を飼いたい、できればマスコフ犬がいい、でも贅沢は言わない。それから天使になりたい、と言った。

「は？」

「今笑った？」

「いや、笑ってない。まったく」

「天使になるにはね、良いことをたくさんしなくてはいけないのよ。それはあなたを救うことや、一匹でも多くの小人を殺すことなの」

一瞬、AVコーナーにあるアナルフアックする天使の姿が思い浮かんだ。直後、首を振った。何を考えているんだ、僕は。

「なんか『アンジェラ』って映画っぽくて。すごく可愛い感じがする」

「ふうん。今度観てみる」

「きみの話を聞いててちよつと元気が出た」

「そう？ だったら今日、小人を殺して。そうすれば私はあなたが元通り元気になるまでここにきてあげるから」

「……わかった」

彼女は小人を害虫だと言った。小人の絵や音楽、芸術的な品は全て人間を駄目にしてしまう。だから、小人は一匹残らず殺さないといけない。

僕はその通りなんだと思った。もう夢も見たくない。

バイトが終わると、包丁を腰の辺りにガムテープで止めて、山田さんの家に向った。チャイムを鳴らすと山田さんの声がした。

「開いてますー」

僕はドアを開けて部屋に入る。山田さんはパソコンを広げて絵を描いている。僕を見ると「やあ、いらつしゃい」と言う。それからヒョコつと立ち上がる。僕は襲い掛かるタイミングを削がれた。

「まあ、ソファアーに座りなよ」

僕はソファアーに座った。そのとき、スピーカーの位置がずれているのに気が付いた。リスニングポイントがソファアーに向けられていた。立ち上がるうとしたとき、山田さんはボリウムを全開にして音楽を鳴らした。

僕は体が爆発するような衝撃を受けた。感覚は研ぎ澄まされた。体が大きくなっている錯覚があつたけど、それは小さくなっているのかもしれない。どちらでも極限まで行ってしまうえば変わらなかった。山田さんの笑う顔が見えた。歪んでいた。

僕はソファアーの上で涎を垂らし、意味不明なことを呟いていた。天井から自分を見下ろしている感覚があり、全身がびりびりと震えていた。

玄関から誰かが走ってきた。あの少女だった。サングラスをかけて、手にはスパナを持っている。山田さんは「ちくしょう！」と叫

んだ。少女はスパナで山田さんの頭を殴り、音楽を止めた。

山田さんは倒れた。白目を剥いて、舌を出していた。

女の子は僕に向って言う。

「早く起きて！」

僕は意識を取り戻して、まだボウツとしていたから頭を抱えた。

「ちんたらしないでよ」

「山田さん、殺したの？」

「殺すのはあなたよ。その包丁でどこでもいいからブスッと刺して」

「……でも小人を殺したら犯罪だよ」

「今更何言ってるの！ 小人を殺してあなたは現実に戻るんでしょ

！ もう、とにかく殺して！ 早く！ また起き上がっちゃう」

僕は山田さんの前に立った。

山田さん、ごめん。そう思ってから包丁を取り出した。だけど、

刺す前に山田さんは意識を取り戻し、目をぶるぶる震わせながら言う。

「その子を信用しちゃ駄目だよ」

女の子は叫ぶ。

「小人の言うことなんて聞いちゃ駄目！」

山田さんは言う。

「その子は飯田君の」

女の子は山田さんを蹴っ飛ばした。山田さんは転がった。

「でも、山田さん僕のことそのオーデイオで殺そうとしなかった？」

「だって、飯田君が先に俺を殺そうとしただろ」

「うるせえ」

僕はそう言っつて、小人に包丁を突き刺した。首を狙ったら頭に当たり、脳漿が飛び散った。まだ動いていたので、体を真つ二つに切り裂いた。

女の子は言った。

「お疲れさま」

そして薄っすら笑った。

僕は突然吐き気がして、その場で嘔吐した。胃液しか出なかった。何度も胃液を吐き出した。それから、山田さんを殺したことをじわじわと後悔してきた。

「まだ終わりじゃないよ。これから他の小人が襲ってくるから逃げなくちゃ」

「は!？」

「小人は仲間が殺されると、執拗に追ってくるから」

「そんなこと聞いてないよ」

「でも、平気。捕まる前に戻ればいいの。現実」

僕は女の子のあとについて、部屋を駆け出た。女の子は外に駐車してあったマセラティ・スパイダーに乗り込んだ。僕は助手席に乗る。エンジンをかけた。

「足届くの？」

「平気」

マセラティは発進した。

女の子は言った。

「出口を知ってるはずだからどこか言って、連れてくから」

「何？」

「出口つつてんじゃん。一回で聞き取れクス！音楽のリスニングポイントみたいな場所があるの！グズグズしていると、すぐに小人が来ちゃう」

「そんなのわかるわけないって！」

「目を瞑って！」

「瞑る。」

「何が見える？」

「真っ暗だ」

「何が見えるか言え！」

「……紫の花、の、畑？ 森のなかかな」

僕は適当にそう言った。

「まあ、いいや。わかった」

僕は私有地の雑木林に来た。女の子は草を掻き分けて進んでいく。

ただ、林の奥に進むと、不気味な視線を感じるようになった。小人が近づいている。女の子は止まらない。引き返さないといけない。そう思った。

「引きかえしたら捕まっちゃうよ。あなたはここから出るしかないの」

僕は女の子の言っている意味がわからず、混乱した。ポケットを探り、煙草の最後の一本に火を付けた。女の子は何も言わなかった。羊歯を掻き分けた先に、くぼ地が出来ていた。そのくぼ地にはたくさんのスマレが咲いていた。

「さあ」

見覚えのある場所だった。テクテクとスマレの群生地へ脚を踏み入れる。直後、足元から小人がよきよきと現れた。小人は僕の脚を掴んだ。どこかで笛を吹いている奴もいる。踊りを踊っている奴もいた。僕の呼吸は乱れた。小人はどんどん増え、僕は全身を掴まれて身動きが出来なくなった。

声が枯れていた。口の中が乾いていた。心臓の音だけが激しくなった。ふと前から、殺したはずの山田さんが歩いてきた。胴体から内臓が出て、顔が半分無い。

叫ぼうにも声が出ない。ただただ後悔をしていた。許してほしい。すぐるように女の子を探すけど、どこにもいない。やはり女の子に騙されたんだ。そうと気づいても遅かった。

山田さんの傷がビデオの逆再生のように治っていく。そのたびに僕に同じ傷が付く。顔が割れて、激痛と激しい思考の麻痺が起こる。でも死なない。それから、右腕の肉が削げ落ちた。胴体が切れ、内臓がべろっと出た。山田さんは体が元に戻ると、ニット帽の位置を直した。

すみれの群生地に僕の血液が流れていた。

リスニングポイントを探して。

声が聞こえた。頭がはつきりした。僕は左腕で這いずりながら、ポイントを探した。そして、ある点に身を置くと、光が目の前を照らし出した。

目が覚める。でも、そこはスミレの群生地ではなかった。どこかのヘリポートだ。僕はアタッシュケースを持っており、ヘリコプターに乗り込んでいた。

ヘリコプターは離陸する。ドアが開いたままだ。僕はシートにしがみ付いている。大きな揺れが起きた。僕は必死でシートにしがみ付いた。

ちくしょう！ 天使なんだから、助けてくれよ！ そう叫ぶ。でももう女の子の声はしない。落下した。僕の見つけたリスニングポイントは、結局偽物だった。泣く暇もなく、僕は地面に叩きつけられた。最後の瞬間、ただ、煙草が吸いたいと思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8322s/>

リスニング・ポイント

2011年4月29日16時25分発行